
死、それは・・・

caviar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死、それは・・・

【Nコード】

N0191A

【作者名】

caviar

【あらすじ】

逆上した殺人者に刺されてしまった和葉。和葉はそんな中、平次に・・・

和葉が刺された。

それは突然の事やった。俺が犯人捕まえよ思ったとき、

逆上した犯人は俺と警察の前で包丁もって、走り出したんや。

ほんで、その先には・・・和葉がおった。そいつは和葉の脇腹にナイフを突き刺したんや・・・。

アタシはお腹を刺された。

不覚にも犯人に刺されてしもた。

でも、意外と痛みはない。

アタシ死んでしまっんやろな・・・

「和葉~~~~!!!!!!」

右の脇腹を刺され、崩れていく和葉の身体を平次は叫びながら支えた。

犯人の方は、大滝警部が取り押さえたようだった。すぐに手錠をかけられ

数人の警察官に取り押さえられていた。だが、そんな光景を見ている余裕

は平次にはなかった。

「平次、叫びすぎやで……」

和葉は言った。しかし、辛いのだろう。その声はいつもの甲高い

明るい声とはちょっと違っていた。そんな和葉の右腹を平次は必死に

手で押さえ止血しようとした。が、医学知識がある平次には

分かっていて。あまりにも和葉の傷口が大きすぎると言う事に……。

血管が大量に切れているのだろう、平次の手はすでに血まみれだった。

とにかく出血が酷すぎたのだ。

「何、辛気臭い顔してるんや・ハア・ハア、こんくらいで・ハア・平気や・ハア」

とは言うものの、和葉の呼吸が荒くなり、苦しそうなのは目に見えていた。

「平ちゃん！大変や。祭りで国道が渋滞しとるから、救急車これへんてっ！！」

犯人を取り押さえ和葉の状態を見てパニックだったのか大滝警部は言った。

このまま救急車が来るのをじっと待っていたら和葉は・・・死ぬ。

そう考えた平次は・・・

「パトカーで病院まで運んでくれ！！」

と大滝警部に叫んだ。パトカーも緊急車両だ。

有事の際にはサイレンを鳴らして走行が可能だ。もちろん、

スピード違反・信号無視も許されるだろう。そして今は、有事である。

何故これほど単純な事に大滝警部は気づかなかったのだろうか？

恐らく、刑事部長の娘がさされて、何より親しい和葉が刺されて

パニックに陥っていた為だろう。

「ちよつとまつとつてや!!」

我に返った大滝は急いで自分のパトカーに向かった。

「和葉、しっかりせいや! すぐ病院連れてつたるからな!!」

平次は和葉に向かって叫んだ。

「だ・だ・から、大・丈・夫ゆ・う・て・る・や・ん・・・」

和葉は今にも死んでしまいそうな声で平次に言った。

だが、和葉自身、自分が助かるとは思っていなかった。

包丁で思いっきり刺されたのだ。

「(アタシ、死んでまうんやろか・・・。当たり前やな・・・

こんな血、ぎょーさんでてるんやし・・・)」

気を抜いたら今にも気絶してしまいそうな辛い状況で

和葉は必死に耐えていた。耐え切れなくなった時、それは

死ぬ時だと分かっていたから・・・。今は死にたくなかった。

平次に想いを伝えるまでは・・・

「なあ、平次」

和葉はかすかな声で平次に向かって言った。

「だまっとれ！」

平次はそう和葉に怒鳴りつけると、もはや力が入っていない

和葉の身体を自分の背中に背負った。怪我人を動かしてはいけない事ぐらい

平次は知っていた。だが、止むを得なかったのだ。

ここに担架などという代物は存在しなかったから・・・。

そういう訳で平次は和葉の、和葉は平次の温もりを感じ取る事が出来た。

「（最期にしてはちょうどええな・・・）」

和葉は平次の背中でそんな事を考えていた。

平次は慌てて和葉を近くまで運んできてくれた大滝警部のパトカー

の後部座席に乗せた。そして自分も後部座席に座る。和葉の身体を支えるためである。そして二人が乗り込むと同時に大滝警部によってパトカーは発進された。けたたましいサイレンを鳴らしながら・・・

「平ちゃん！しっかり捕まっときや！！」

大滝警部は平次に言った。

「・・・平次、聞いて・・・ほしいことがあるんよ」

少々走った所で和葉が震えた声で言った。

「喋ったらアカン！！」

必死になって和葉の傷口を止血を試んでいた平次は叫んだ。

今のでまたかなりの血が出たことが平次にはわかっていた。

もちろん、本人である和葉にも・・・

「アタシな・・・ハア・・・平次のことか・・・ハアハア・・・ハア・・・メツチャ・・・ハア」

それでも和葉は喋り続けた。

恐らく、少し喋るだけでも和葉は激痛を感じているだろう。

そんな辛い状況下にもかかわらず和葉は喋り続けたのだ。

「喋たらアカン！！死んでまうでっ！！」

平次はそんな和葉を叱責した。

「めっちゃ・・・すきやったんよ・・・ハアハア」

「・・・」

そんな和葉の言葉に平次は絶句した。

・・・

「ハア・・・ハア」

・・・

「ハア・・・ハア」

・・・

和葉の荒い呼吸音以外の沈黙が続くパトカーの後部座席。

「！？・・・か、和葉・・・俺も、俺もお前が好きや！だから喋らんでくれ！！」

平次は冷静になると同時に言葉を返した。

そして必死に和葉を抱きしめながら哀願していた。

「・・・それが聞けて・・・ハアハア・・・安心したわ・・・振られるなん・・・」

やないかって怖かったんや・・・ハア」

「あほ、喋ったらあかんゆうとるやないか！！」

平次は大声で叫んだ。

「・・・そんなん・・・どっちみち、同じや・・・」

和葉はかすれるかすかな小声で平次に言った。

故意にはない。もう体力が残っていなかったのだ。

それでも和葉は平次の頬にペタンと血まみれの右手を当てた

平次にとって和葉の手は意外と小さかった。

一瞬、平次は身体を硬直させた。

「・・・今までありがとな、平次・・・」

蚊の泣き声のような和葉の言葉は平次に届いた。

「平次、愛してるで・・・」

和葉は最後の力を振り絞るかのように言った。

平次が言葉を返そうとしたその時。

和葉の手はゆっくりと平次の頬から離れていった。

そして力なさ下にはちゃんと手は後部座席の

クッションの上に倒れてしまった。

「・・・和葉？」

頬に血をつけた平次が疑問の声を上げたと同時に

和葉の目はゆっくりと閉じていった。

「あほ！和葉！！気絶したらアカン！！死んでまうで！！！」

和葉を抱きかかえ泣き叫びながら平次は和葉の耳元で叫んだ。

しかし、和葉から言葉が帰ってくることは無かった。

還ってくることは決してなかった。

脈拍を確認する平次。しかし・・・・・・脈は無かった。

冷たくなっている和葉の身体。

残されたのはパトカーのサイレント平次の泣き声、

ルームミラーで状況を見ていた大滝警部の涙・沈黙ただそれだけだった。

「か、和葉・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

平次が再度、和葉に呼びかけるが和葉からの応対はなし・・・。

まるで眠っているかのような和葉の身体それだけ・・・

「か、和葉あああああああああああ！！！！！！！！！！」

平次は泣き叫びながら和葉を必死に抱きしめ、呼ぶ。

しかし・・・・

和葉がその言葉を返す事はそして息を吹き返す事はなかった。

つまり、それは和葉の死だった。

「俺の、俺のせいや……。俺が和葉をあんどこ連れてかんかったら……」

引きつった顔を浮かべる平次。その様子を見て即座に大滝警部は車出道端に止めた。平次が今にもおかしくなりそうだったからだ。もちろん、

大滝警部自身、和葉の死は受け入れられてはいない。だが、それ以上

平次の様子は尋常ではなく今にも走行中の車から飛び降りかねない危険な状態だったからだ。

「……平ちゃん……」

大滝は平次にそれ以上の言葉をもちえなかった

「……ハハハ、そんなアホな、和葉が死んだやと……？」

気が狂ったかのように突然平次は笑い出すと、つぶやいた。

「ははは、そんなアホな」

「……和葉……」

暫く笑い続けた平次だが、笑い終わると和葉の名を一回、口にした。

「すぐ、俺も行くからな」

そして、すぐにそうつぶやくと、平次はポケットから小刀を取り出した。

平次は小刀を自分の首筋に当てた。

「へ、平ちゃん……！」

それを見た大滝警部は後部座席にいる平次に大声を張り上げた。

「大滝ハン、俺も和葉んどこ行くわ……」

平次は静かに言った。

「平ちゃん、アカン！死んだらアカン……！」

大滝の叫び声が車内を木霊した。しかし、大滝は身体が動かなかっ

た。

いや、動けなかったと言う方が正しいだろう。

「親父に宜しく、伝えてくれ・・・」

平次は死んでしまったような声で言った。

「あかん!!」

大滝の叫び声が車内に響き渡った。

次の瞬間、平次の咽からは夥しい血液が噴出していた。平次はゆっくりと

和葉に覆いかぶさるように倒れた。ゆっくりと・・・。

コナンが和葉の死を知ったのはその晩だった。

服部平蔵、直々に毛利探偵事務所に電話がかかってきたのだ。

電話を取ったのは小五郎だった。その数分後説明を受けた

小五郎が電話をおいた。そして小五郎は神妙な顔で蘭とコナンに

大阪での出来事を伝えたのだった。

それを知った時、コナンは驚きを隠せなかった。蘭は和葉の

死を知り大粒涙をぼろぼろと流していた。小五郎にいたっては二人ほど驚いていないものの、やはり少々驚きを隠せないと言った様子だった。

「和葉ちゃんが死んだなんて・・・」

翌日、新幹線の車内で大阪に向かう中、蘭はつぶやいた。

早朝の列車だった事と平日だった事、そして列車が博多行きではなく新大阪行きだった事、出張客が少なかったため、車内はガランとしていた。

「なんでも、逆上した犯人に刺されたそうだ。」

小五郎は言った。

列車は新横浜を通過しようとしていた。

「平次兄ちゃんは!？」

「危ない状態らしい」

小五郎はそれだけ言うつと窓の外の景色を見たまま黙り込んでしまった。

ちょうど小五郎が外を見た時、列車は新横浜駅構内を走り抜けていく所だった。

「そんな・・・」

蘭が弱い声を出した。

コナンは言葉を出せなかった。

複雑な気持ちで一杯だったのだ。

「（・・・服部・・・）」

とにかく最悪な状況だけは避けてほしかった。

平次の死という最悪な状況だけは・・・

列車はそんな彼らを乗せ、次の停車駅名古屋を向けて、

そして京都・大阪に向け走っていった。

大阪の病院にたどり着いた時、そこには平次や和葉の両親そして大滝警部がいた。遠山刑事部長は涙を流し、静華は祈っていた。

服部平蔵は相変わらず目を細めたまま静かに手術室の外の長椅子

に座っていたが、どこか辛そうな表情をしていた。大滝警部は椅子に座ったまま、まるで取調室で尋問されている殺人者のごとく、頭を抱え黙り込んでいた。責任を感じているのだろう。

病院の通路はそんな異様な光景だった。

「あのお・・・平次君は？」

一番冷静だと思われる平蔵に小五郎は真剣な声で聞いた。

しかし、平蔵はすぐに返事を返さなかった。

「……」

そんな平蔵の様子をじっと伺う小五郎。彼の後では蘭と

コナンがその様子を同じくじっと伺っていた。

「……まだわからへん」

少ししたら短い言葉であるが言葉を返してくれた。

「そうですか……」

小五郎はそれだけを言っていると彼らと同じように椅子に座った。

丸一日以上、平次は目を覚まさなかった。恐らくここにいる

人たちはそれから一睡もしていないだろう。その証拠に

目のまわりには隈をつくり何より疲れた表情をしていた。

どのぐらいの時間がたったのだろうか？

コナンが時計を見たら数時間程度だった。時刻は午後三時

を示していた。そのときだった。部屋の中から一人の看護師が出てきた。20代後半の女性で右脇にはカルテや書類が入っていると思われるブルーのクリアファイルを持っていた。

「服部平次君の関係者の方ですね」

小五郎に向かって真剣な声で看護師はいった。

「はい」

小五郎は言葉を返した。

看護師は真剣な表情をしていた。

「平次君の容態は……」

そこまで言って一回言葉を切った。

ゴクッ

その様子を見て唾を飲み込む一同。

「峠を越え、意識もすぐに回復するそうです」

にっこりと笑顔を作り言った。

その看護師の表情につられて堅くなっていた

皆の表情が一遍に緩んだ。

それでも数秒後には和葉が死んだことを思い出し、一同は再び暗くなったのだが・・・。

303号病室

ここに平次は眠っていた。彼のベットを取り囲むように皆並んだ。

麻酔がそろそろ切れ、意識を取り戻す時間だった。

「う～～～」

突然平次の声が漏れた。

「平次!!」

静華は息子の声を聞いて叫んでいた。

そして平次の目はゆっくりと開かれた。

「和葉は！！？」

それが完全に開かれたと同時に平次は叫んでいた。

一同は静かに首を横に振った。

「・・・和葉、やっぱり死んだんやな・・・」

平次は普段から考えられないかすかな声でつぶやいた。

頷く事も出来ず、一同は難しい顔をしていた。

「服部君・・・前に和葉ちゃん言ってたよ。」

『アタシが死んでも平次には生きてほしい』って・・・」

蘭は静かに言った。蘭が和葉からその言葉を聞いたのは

美國島での事件の直後だった。矢の話をした時に和葉が

蘭に言った言葉だった。

「・・・和葉・・・」

平次はもう一度和葉の名をつぶやいた。

「平次！もうこない馬鹿な真似するんやない！」

そう言ったのは平蔵だった。

『本当に心配したんやで』、そう言っているようだった。

「そつやで、平次君。和葉のことはもうしゃーない」

その意外な言葉には皆驚き、その音源を振り向いた。

その言葉を発した人物、それは遠山刑事部長だった。

「平次君、和葉の分まで生きてくれ・・・生きてくれんと

和葉の為にならへんのや・・・頼むから生きてくれや」

遠山刑事部長は涙を流し掠れた口調で言った。

その言葉は皆の胸の中で何度も何度も木霊した。

平次はそんな遠山部長の言葉に涙を流した。

大粒の涙を一滴だけ・・・。

『和葉？オレ生きとつてええんやろか？』

―何を当たり前な事いうん？ -

『そやけどオレお前を・・・』

―守れへんかっただけやん。 -

『でもそれは！』

―平次まで死んでどないするんや！

おっちゃんとおばちゃん悲しみます気なん！

そんなんやったらしつかり生きや！！ -

『和葉・・・』

―さよなら―

『・・・さよなら、和葉。ありがとな今まで・・・』

服部平次は誓いました。

必ず、和葉の墓を守ると・・・。

そして今後和葉以外のどんな女性をも愛さないと・・・。

服部平次は誓いました。

涙を流して・・・。

(後書き)

和葉「何やねん！この作品！！」

ドゲシボコバキボコゲシ

caviar「ぎえゝゝゝ！お、おたすけを！！」

和葉「今日という今日は許せへん!!」

ドガシボンバキンドゴバキーン

caviar 「ひえ〜〜〜〜〜!!!!!!」

和葉「一体何やねん！この作品、何でアタシが死ななアカンのや！」

caviar「いや、これは我々の為に必要な……」

和葉「絶対に必要やない!!!」

caviar 「そう断言せえへんでも……」

和葉「必要やないっちゅうたら必要やない！！次回投稿、せんでもいいでっ！」

caviar「あのおく私管理者なんですけど……（だから投稿ってなんです？）」

和葉「……………」

•

•

•

•

•

[illegible]

「……そんなどうでもいいやん！」

作者のcaviarです。

お読みいただいております。今回はメタモルフォーゼ製作中に

思いついたことをほいっと思いついただけの作品ですのでいつもにまして変な作品だと思います。実はこのお話、本当はまだ続くのですがそれは

まあ制作できれば公開したいと思っています。
 ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0191a/>

死、それは・・・

2010年10月15日00時38分発行